

# 近世初頭における石火矢の出現と普及

宇田川武久

## 目次

はじめに

一、石火矢使用の始期

二、石火矢使用の増大

三、島原一揆と石火矢

四、異国警備と石火矢

まとめ

## 論文要旨

筆者は十六世紀なかばの鉄炮の伝来事情とその後の普及の経緯を論じたことがある。この外国渡来の新兵器鉄炮については関心を集めているが、本稿で問題とする石火矢については、過去に科学技術史や金工史の分野から鑄造技術や梵鐘を鑄造する鑄物師との関連で注目されたくらいで関心は薄く、その後の研究成果に乏しい。識者のなかには石火矢の存在自体に疑問を抱くむきもあるが、銃砲史の研究者有馬成甫氏の指摘を俟までもなく、石火矢は存在している。有馬氏は朝鮮王朝が石火矢を製造したのは文祿元年と推定するとか、靖国神社所蔵の石火矢を大友一号砲と呼びたいと主張されているが、この説は疑問である。

いっぽう歴史学の分野から石火矢に關説した論著があるが、いずれも部分的な理解に止まっているように思う。

そこで本稿では、十六世紀なかばから十七世紀初頭における石火矢使用の事実をまず確認したい。そして、つぎに時代と共に使用が増大し、ついに十七世紀初頭にそれが頂点に達したことを実証したい。

とはいえ、この火砲の全体像を理解するには、石火矢の名称と構造、石火矢製造の技術的な問題、大砲術の発生とその諸流、外国の火砲との関連などが今後究明されなければならない。残された課題については他日を期したい。